

新刻小學修身書

櫻老加藤熙編
初等科之部

卷五

271
P
72

東 京 圖 書 館				
		八	十三	新書門
冊	號	架	函	類
				部

K110.1
23
5

櫻老加藤熙編

新刻小學精言書

版權所有 時習堂藏

新刻小學修身書卷之五

櫻老加藤熙 編

第一事君

○韓魏公外不在りと雖も然もをも其
心常も社稷も係る身老る不至て而し
て心益篤し。病と雖も國家を忘れず。或
い時有りて祖宗に一法度を更め。朝廷
の一紀綱が壞るを聞けば。則ち泣血し

て終日食いば。自警編

○宋比王郁官となり。仁恕あり。將小死
せんとし。家人よ告げて曰く。吾れ官を
歴て五十年を踰ゆ。刑を用ゆるを慎み。
人を活やすこと多し。後必らば興る者
有り。其を吾が孫小在る。孫の欽若果
しく。進士小擢られ。相小拜す。坦園三子
紀訓

第二言語

○言を以て人を傷つくる者。刀斧よ
りも利あり。術を以て人を害する者。此
の。庖狼よりも毒有り。言慎まざるべ
らず。術慎まざるべからず。省心錄

○俗語の市小近く。鐵語の娼小近く。諱
語の優小近し。士君子一涉せば。此を獨
り威を損するのみあらば。亦福を逃ひ
難し。長者之言

第三躬行

○木養ふ所阿れば。則ち根本固ふして
 枝葉茂り。棟梁の材成る。水養ふ所阿れ
 ば。則ち泉源壯ふして。而して流派長く。
 灌溉の利博し。人養ふ所阿れば。志氣大
 小して。而して見識明か小。忠義の志出
 づ。養ひざる可ん也。省心録

○婦女の衣錦惟潔淨を務む。尤も衆小

異あるべからず。且つ十數同一く處る
 う如き。而して一人に衣飾獨り異たり。
 衆小指目せらるるをば。其行坐能く安き
 や。いと也。同上

○昏禮ハ萬世の始あり。故小婦人者
 信實を徳となす。一よび昏禮をあせ
 ば。身を終るべき改めば。夫死すまば再
 び他人小嫁せず。禮記

○ 婦女の舅姑小事
ること。柔順ふりて
意小逆のず。婦たる
道を失ふべからば。
胡瑗家訓

第四 誠實

○ 信の行の基あり。
行の人比本あり。人



行ふ所らざれば。以て成ることなり。行
信小非らざれば。以て立つことなり。故
小行の人小於ける。譬へば濟りの猶舟
の楫を待つが如きなり。博覽古言

○ 高くして欺くべあらざるもの天
あり。尊くして欺くべうらざるもの
君あり。内かくして欺くべうらざるもの
親なり。外にうらざる者

人あり。四者の既ふ欺くべからば。心
其を欺くべけんや。心欺くず。人其れ我
れを欺くんや。省心録

○人の心を存する忠厚あるもの。必
らば言を立つるも忠厚。言を立つる忠
厚あるもの。必らば事を作するも忠厚
なり。身必らば忠厚に福を享け。子孫必
らば忠厚の報を食む。魏環溪庸言

第五 忍耐

○人拂亂の事小遭ふて。愈々當さ小
心を動さず。性を忍び。其能いさる所を増
益すべし。行ふ所窒礙の所ありて。必ら
ば以て之を通せんこと有るを思ひ。必
則ち智益明あり。讀書録

○水柔ふ。石剛多れとも。石。水に爲め小
漸く浸されて。蕩薄を爲ること之れ久志

ければ錯削剥落を剛も柔も勝つこと
能はざるごとし此を亦見るべし。同上

○忍の一字ハ。衆妙の門族を睦し。事を
處するハ尤も先務となす。若志清儉は
外更ハ一忍を加へば。何事の辨せざら
ん。同上

第六學問

○學を爲す。最も實を務めんこと必要

を。一理を知ると如し。則ち一理を行ひ。
一事を知ると如し。則ち一事を行ひば。
自然ハ理事と相安ふべし。虚應不切の
患なき。讀書録

○看得より。學を存するに別法あり。只是
一事を知れば。一字を行ひ。一句を知れ
ば。一句を行へば。便ち益あり。同上

○學を爲すは工夫ハ。日用の外ハ在ら

バ。身を檢一則ち動靜語默。家の居れハ。則ち親の事一長を敬ま。理を窮めむ。則ち書を讀み義を講ま。大抵只一箇の是非を分別して。而して彼を去り此を取らるを要するのみ。同上

○北史斐誼の字ハ。士正。少して儒學を好み。褐を太學博士の釋く。常て常景の從て書百卷を借り。十許日の便ち

返す。景其讀む能はざるを疑ひ。每卷策問を召ふ。應答遺まなり。十七史蒙求

第七 處事

○理の順ふて而して行ふとらる。則ち直して而して易く。理の逆ふて而して行ふとらる。則ち曲して而して難し。讀書錄

○事最も輕忽しすべくららば。至微至易

のもの。と雖也。皆當さ小慎重を以て之
を處さべし。同上

○凡そ爲さ所當さに下て理お合ふこ
と致求むべし。曰ふ勿き。今日姑らく此
くの如くし。明日之を改めんと。一事苟
もまきば。其餘の苟もせざるの存。上同
○非理外より至れば。當さに雨を防ぐ
が如くまべし。即時おしを而して避け。

格獸は勇を恃む勿き。非理内より起ら
ば。當さ小湯杖探るが如くまべし。即時
おして止め。漆指の欲お従ふ勿れ。表氏家訓
○事審らうに處せん。と致要きと雖也。
然きども亦揣度過了すべうらば。事人
の説を聽從せん。と要きと雖も。亦人の
爲めお惑亂せらるべうらず。擇ふこと
須らく精あるべく。行ふと須らく果お

居業録

○汲々焉として速うならんと欲する母れ。循々焉として敢て惰る母れ。止々學問此の如きのみ。小非ぞ。日用事物の間。皆當さ。小此の如くあるべし。乃ち能く成る所らん。許魯齊語錄

第八 交際

○善を責むるは。朋友は道あり。只須らく懇到切至以下之。小告ぐべし。然らばして徒ら。小口舌。小資し。以下仇となれ。益なきあり。

○古人朋友を言ふて。交善と曰ふ。近日交善なり。所謂交善ある者。は。狎る。耳。狎玩。は。是習氣の最も重大。害なきに似て。而して道德。禮義。實。小虧損せざるあり。頼古堂藏書

○朋友い。倫を傷け化を敗るを除くの
外の。寧ろ十分小他を責むべし。一分も
他を薄んごべし。我を他を薄まる
の意あらば。則ち誠意已小衰ふ。正言阿
りと雖も。人を感する能はば。且つ怨を
招き易し。魏叔子日録

○親族隣里居地。甚だ近く。凡牲畜の侵
害。僮僕に争闘。言語の相角。行事に錯悞。

勢盡く免る能はず。惟心を體し。彼此相
容るふ在り。但己れを反求して。人を責
むべし。あらば。若志小忿をひごんば。遂小
嗔怒を生じ。必らず怨相尋て致し。終小
了る時たうらん。願體集

○己れを待つもの。當さ小過ちなき
の中より。過ちあるを求むべし。獨り徳
を進むのみあらば。亦且つ患を免れん。

人を待つをの。當さ小過ち阿比のみお
らず。亦且つ怨を解ん。同上

○大常少卿希亮陳公。財を輕し。施を好
み。恩義小篤し。少ふして蜀人。宋輔と游
ぶ。輔京師小卒き。母老ひ子少かし。其母
を養ふこと終身おして。而して女を以
て其孤端平小妻にし。諸子と游學せ志
む。卒小子。沉同と進士第小登る。名賢彙編

第九 勸善

○善人と同く處ると起ひ。則ち日小善
訓を聞き。惡人と從ひ遊ふと起ひ。則ち
日小邪情を生ま。蓬麻間小生まれば扶
けざして自ら直し。白沙溜小入るとき
は染めをて自ら黒し。博覽古言

○不善を顯明の中小爲まものい。人得
て而して之を誅ま。不善を幽間の中小

爲さるの神得て而して之を誅す。人
小誅せらるる者ハ其禍淺ク。神小誅せ
らるる者ハ其禍深シ。頼古堂藏書

第十剛毅

○身心を收斂檢束して。細至微至静至
定の極小至れば。事を作ること愈々力
有りて。凝定静密自ら馳せず。讀書錄

○人の當さ小自信自守まづ。之を稱

譽志。之を羨奉まど雖も亦之り爲め小
沮を加へず。同上

○石中の火ハ。石自ら之を生して而し
て終小之を以て自ら焚う。木中の蟲
ハ。木自ら之を生して而して終小之を
以て自ら害す。故小士君子の氣骨ハ。堅
ま枝貴ぶなり。頼古堂藏書

第十一 警戒

○人我き小負く時。我れ當さ小吾れの
負くを致さ所以を思ひ。以て自ら反し。
且つ以て切磋砥礪の地と爲さべし。我
れ小於て多少益あり。烏く小之を仇視
さ容けん。

○人を責むるものい交を全ふせざ。自
ら怒まるものい過を改めば。自ら満る
ものい敗を。自ら矜る者い愚。自ら賤ふ

ものい害あり。多言利を獲るの。黙して
而して害なきか如うべ。省心録

○夫れ石の玉を攻むべし。塩の金を治
むべし。魚の錦を濯ふべし。灰の布を浣
ふさべし。物固より賤を以て貴を治め。
醜を以て好を治むるものあり。則ち物
の賤且つ醜あるもの。何ぞ之を輕視さ
べけんや。頼古堂藏書

○看來り看去る小。吾人れ千病百痛。只是よく之り胎を爲ま。做志來り做去る小。吾人れ趕て聖賢小上らざる所以。只是よく之り崇りをあむ。讀書錄

○人れ徳性い。天資小出つるもの各偏まざる所あり。君子い其偏まざる所あり。故知る故小學問を以てして而して之を補ふ。則ち全徳の人となむ。情小任ト事

を行ふ。故小失多し。表氏家訓

○人の一身。日小食まると一升小過ぎば。終年衣まざる所一兩匹小過ぎば。禮儀雜費の若きも歳計亦數あり。此を誠小切身闕くべからば。同上

○人家子弟。君子を近づけて而して小人を遠けんと欲し。君子を近づけり。則ち多く長厚れ言を聞き。多く端謹れ行

を見り。自然薰習日か深ふして。徳性循
謹なり。小人を近づくれば則ち浮華の言。
刻薄の行。耳目か接して而して身心か
染む。子弟の淳厚なる者と雖も。亦將か
之と俱か變ぜんとい。同上

○子弟の父兄の勢を挾て以て人を凌
ぎ。又丈夫の妻妾に財か憑て而して富
を致せば。有識は士の與ふ伍を爲すは

羞るべし論あり。即ち父兄妻妾も且つ竊
か之を笑ふ。頼古堂藏書

○名利は人を壞るは。三尺は童子も皆
之を知る。而して名を好むの過ぎるは
又人をして。復君父を顧みざらん。世
か親命を妨げ以て身を潔ふ。朝廷を
誣て以て直を賣るをのり。是忍ぶべ
くば。孰か忍ぶべからん。畜徳録

○性情苛戾者多之。能く骨肉を以て相親まごらむ。況や遠きものをや。和平者多之。能く仇家を以て其怨を忘れしむ。況や平人をや。日録

第十二 改過

○人此過失阿る。猶身の疾病阿るが如し。之を改むる小藥石を以てし。之を誨ふる小廉恥を以てす。過失と雖

も賢者たる小害阿らば。疾病と雖も全人より其失いば。省心録

○士大夫此口を開き。足を動かし。罪過懺悔之法阿らざる。惟慚愧を以て第一とし。惡人の是ならざるべし。只妨げぬと説き。毫も慚愧の意なき。終小過を改むるの時なき所以あり。古頼堂藏書

○日用飲食須らく慚愧を知るべし。蓋し耕さざりて而して食ふ。己も薄福消志難き哉。覺ふ。況や復棟擇して精を求むるは過なり。表氏家訓

○過を改むる人の。天氣新晴に如く。一般自家固より自ら灑然たり。人之を見る亦分外の喜ふべし。思辨錄

○魏鄭公薨む。唐の太宗自ら碑文を製

し并せて自ら之を書き。後ち讒言せられ。詔して碑を仆さしむ。高麗を征し意の如くならざるも及び深く仆さすべからざるを悔ひ。乃ち歎して曰く。若し魏徴阿らば。必らば我を以て此舉阿らざるべし。既も遼水を渡り。驛を馳せ。祀るも少牢を以てせしむ。復た碑を立つ。孝經

K110,1 - 265,2

新刊 小學修身書卷之五

明治十七年九月廿九日版權願
同年十月十三日版權免許發兌

福島縣士族

編輯人

加藤 熙

東京府士族

出版人

松井方景

茨城縣平民

出版人

寺田新助

新治郡土浦仲城町六十八番地

定價八錢